

意識感応型パソコンの世界

粉川哲夫

粉川さんは現象学を追究する学者だが、メディア、ニューメディアに関する鋭い切り口の評論で最近注目を集める気鋭の評論家でもある。粉川さんの評論に一貫して流れる主調音は“個人”にとってニューメディアとは何か、という問いかけである。

今こそこの視点をわれわれのものにすべきではなからうか？

2024年が終わろうとしているいま、この4,50年間に起こったことを思い起こすのは至難のわざだ。あまりに多くのことがありすぎた。が、最大の変化は、2000年を境にして、主要エネルギーが太陽エネルギーに代ったことだろう。すでにアメリカ合衆国は、1973年のオイル・ショック以来、石油から太陽エネルギーへの転換に着手していた。ただ、問題は、それ以前から巨大な予算を投入して進められてきた原子力発電を石油エネルギーの代案と考える人人が多数おり、その頭ごしに太陽エネルギー計画を進めることが難しいことだった。しかし、1979年にペンシルバニア州のスリーマイル島で起こった原子力発電所の事故で、原発推進派は後退しはじめ、やがて原子力は、それをいつ“安楽死”させるかだけが問題になるようになった。すでに1980年代の後半には高性能のソーラー・セルが実用化され、太陽エネルギーがその後の主要エネルギーになるであろうことは、産業の先進的な部分にいる者ではなくても、みなうちちわかっていた。問題は、そのことを全く理解しない人々を納得させるに足る“正当な理由”を見つけることだけだった。

日本では、1987年になってようやくそのチャンスがやってきた。東海沖で起こった大地震で東海原発と福島第一原発の原子炉が軽度のメルトダウン危機に陥ったとき、エネルギーの転換政策が軌道に乗りだした。

こうして2000年をすぎるところには、世界の“富める”地域と“貧しい”地域との分布が、太陽の恩恵にどれだけ浴しているかで決まることになった。それまでは、海水浴客でにぎわっていた常夏の国々に各国の企業が進出し、巨大なソーラー・セルの太陽光発電所を建設した。太陽に恵まれない国々は、競って衛星上に発電所を作ろうとし、エネルギー競争は、宇宙にひきあげられた観があった。

電源の心配をしなくて済む情報機器が一般家庭にまで浸透したのは、日本では、10年ぐらいまえのことだが、そのため、「電源スイッチ」という言葉は死語になった。すでに脳波ないしは意識に感応するコンピュータが一般のラジオにもテレビにも装備され、持主が、音を低くしたいと意識すれば、また画面を消したいと意識すれば、それらは自動的にコントロールされるようになった。

この点に関するテクノロジーの進歩は、20世紀から21世紀にかけての数年間に飛躍的に進んだ。ひとつには、1980年代にはまだまやかしの「心靈術」とみなされがちだったサイクロトロニクスの秘密が明らかになり、「テレパシー」をエレクトロニクスの装置で解析できるようになり、様々な“マルチ・スペクトラル・イメージ・アナライザー”が開発されたこと、もう1つは、遺伝子操作の技術によって細胞の“マイクロ・チップス”を合成することに成功し、“ファジー”な思考をも行なうことのできるコンピュータが完成されたことが、意識感応型コンピュータの発展を加速させた。

上野の科学博物館には、いまではアンティークとして珍重されている「パソコン」や「ワープロ」が展示されている。われわれの世代には、もはやこれらを十分に使いこなせるものは数えるほどしかない。まず、もう一、二時代まえに使われていた「タイプライター」から継承された「キーボード」を使いこなすのが難しい。いまでは“高級な”趣味の1つになっている“ピアノ演奏”と同様に、それをあやつるのは、特殊な専門家の仕事だ。われわれは、もはや体をあいうやり方で訓練しないのである。“指先”や四肢をそれぞれに機能分解することが、心理的なストレスの要因になることが明らかになってから、身体運動のパターンが変わった。指先や手を繊細に動かさなくなったわけではないが、舞踏やマイムのやり方で全体的に動かすことが一般化した。歴史的な記述によると、「キーボード」は、1970年代に「フェザー・タッチ」になったと記されているが、われわれからすると、あの感触は重すぎるのである。

古典的な「フィルム」や「ビデオ」をフィルム・センターに見に行くような場合を除き、映像はすべてホログラフィになり、昔

の「フィルム」や「ビデオ」も、ほとんどホログラフィに移しかえられているので、「パソコン」や「ワープロ」が「テレビ・モニター」というものを使っていたことを想像するのは難しいかもしれない。当時、そうした機器を使いはじめたオフィスでは、眼精疲労や「テクノストレス」という症候群が社会問題になったようだが、いま博物館で見る「パソコン」の「テレビ・モニター」に映る16ドットの文字は、むしろ芸術的な美しさをたたえている。

意識感应型コンピュータが一般化するまえに、しばらくのあいだ「音声認識・応答」型のコンピュータが流行したことがあったが、長い活字の文化によってオーラルな語りの文化をすっかり失い、声を出しながらよりも沈黙したまま表現することに慣れてしまった20世紀人は、個人的な表現・思考の用具としては「キーボード」型のコンピュータを好んだ。それに、1つの部屋で何人かの人々が「音声認識・応答」型のコンピュータを使用するのは、ときとして混乱を招いたらしい。

しかし、意識感应型のコンピュータが出来てから似たようなトラブルが起こった。音声マイクよりも鋭敏なテレセンサーをもつこのコンピュータは、その使用者以外の意識流を拾ってしまい、とんでもない作動のしかたをするのである。また、意識流は、人によってその伝播が異なり、「超能力者」の場合には、市販のコンピュータでも数百メートル先から感应させてしまう。これは、いままでも深刻な社会問題になっており、一部の国々では「超能力者」を収容所へ入れているところもある。

しかし、世界の理論的な大勢は、意識流を「孤立した自我」に閉ざすことはできないという方向へ向かいつつあるように見える。つまり、意識感应型コンピュータは、「わたし」の意識と欲望を解放したが、それは単に「わたし」にとっただけではなく、すべての「わたし」にとっただけなのであり、「わたし」は、巨大な意識流のなかで溶けあっていることにあらためて気づいたのである。

それは、ある意味で恐ろしいことだった。数年まえ、ある芸術家が、最新の意識感应型コンピュータを街の広場に据えて、集団パフォーマンスをやったことがある。彼は、

法律で禁じられている1立方メートル以上のホログラフィ映像を映し出せる装置を用意し、そこに集まった人々に「自由想像」（これも、法律で禁じられている）をさせた。結果は、この世に存在するありとあらゆるグロテスクなものの巨大な映像が広場に出現した。映像は、人々の勝手な意識によって次々と変化する、1つの映像に別の映像がかさなりあい、湾曲し、やがて竜巻の渦のようなものになっていた。集まった人々は、その錯綜した映像に感应し、意識を高揚させ、その意識に感应したコンピュータがさらに錯綜し、うねり狂うホログラフィを作りあげた。

わが国でコンピュータの集団使用が禁じられたのはこの事件の直後であるが、当局が恐れたのは、目下実用化が進められている「ホログラフィ・汎用物化装置」がこのような「危険」な集団パフォーマンスと結びついた場合、社会秩序が破壊されかねないからである。この「汎用物化装置」は、いまわれわれが使っている流体樹脂平面装置とは異なる。こちらは、コンピュータが記憶素子に入れた意識流を旧型の「デジタル・コード」でパターン化し、それを再生しながら「物化」してゆくもので、この文章も、この装置を使って1980年代のスタイルの「活字」で「物化」されるはずだ。

この装置では、ホログラフィを立体的に「物化」することはできないが、図形はむしろのこと、ある程度の厚みをもったテキストを織ることはできる。そのため、平面物化装置でも、一般人が高性能のものを使うには、意識流の「異常飛踏検査」に合格しなければならないのである。というのは、この装置を用いれば、50年以上も前にブルガリア出身の芸術家ヤヴァシェフ・クリストが莫大な費用と労力を費して行なったことを1人でできてしまうのであり、樹脂原

料さえあれば、短時間に巨大な建物を「高速物化装置」が紡ぎ出したテキストスタイル「梱包」してしまえるからである。**意**識感应型コンピュータの発達によって、かつての「個人主義的モラル」や「プライバシー」の観念は、くずれてしまった。今日では、相手が何を考え、感じているかをコンピュータが映し出してしまえるからである。しかし、古いモラルや「プライバシー」にしがみついた人々は、近年、新しい「意識トレーニング」に励んでいる。それは、「自分」（なんとむつかしい言葉だろう！）が考えていることをコンピュータに感知されないようにその意識流をコントロールしようというのである。が、禪が唱道してきた「無我



の境地」は、意識流の伝播を隠蔽することではなく、逆に、その流れを「自分」のうちに閉ざさずに解放することなので、このトレーニングには役立たないらしい。そのため、ある流派は、1つのことを考えながら、同時にある種の妨害意識流を作る方法をあみ出そうとしているという。はてさて、そんなにまでして「プライバシー」なるものを守りたいのだろうか？ われわれのような若い世代には、一時代前の文化を理解することは難しいことである。

略歴【こがわ てつお】

1941年生まれ。和光大学人文学部非常勤講師。現在、評論活動を積極的に行っている。著書『メディアの牢獄』など多数。

PC-2000
PC-6000/MKII
PC-6600
PC-8000/MKII
PC-8200
PC-8800/MKII
PC-9800
PC-100

Oh! PC

特集 **ボクの夢のパソコン**

1985 各ジャンル18人が
夢のパソコンイメージを語った

カラー・ニコグラフィック/パソコンフェア

80MKII機能拡張シリーズ

PC工作入門再開

8086アセンブリ言語講座

スーパー88シリーズ



1
JAN.1985
定価480円